

目次

序	なぜ「移動する子ども」学なのか.....	1
1.	はじめに.....	1
2.	「移動する子ども」という現象.....	1
3.	「移動する子ども」という経験.....	3
4.	「移動する子ども」という記憶.....	4
5.	分析概念としての「移動する子ども」.....	5
6.	何をどのように研究するのか.....	6
7.	本書の構成.....	7
第1章	「移動する子ども」という記憶と社会.....	9
1.	人の移動をめぐる思索.....	10
2.	移動する人々と社会の関係——「異人」をめぐる議論.....	10
3.	マージナル・マンとストレンジャー.....	13
4.	エスノスケープと想像力、ディアスポラ.....	16
5.	「移動する子ども」という視点.....	21
第2章	「移動する子ども」というフィールド.....	27
1.	はじめに.....	28
2.	「人と移動」の研究.....	28
3.	「移動性」(mobility)の研究.....	32
4.	「ネットワーク資本」と「ことばの視点」.....	35
5.	「移動する子ども」というフィールド.....	38
第3章	ことばとアイデンティティ	
	——複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える.....	41
1.	はじめに——「移動する子ども」と一青妙.....	42

2. 研究の視座——なぜ「移動する子ども」なのか.....	44
3. 「移動する子ども」という家族の物語 ——青妙の自己エスノグラフィーをもとに.....	54
4. 考察——「移動する子ども」という視点から見えてくるものは何か...	63
5. 複数言語環境で成長する子どもたちの生をどう捉えるか.....	66
第4章 名付けと名乗りの弁証法——くくり方を解体する.....	69
1. 「ベトナム系日本人」というくくり方.....	70
2. 「ベトナム国籍者」と「ベトナム系日本人」.....	71
3. 「ベトナム難民」として来日した親を持つ子どもたち.....	74
4. 考察.....	84
5. 「ベトナム系日本人」というくくり方の無力さ.....	87
第5章 「移動する子ども」学の研究主題とは何か ——複数言語環境で成長する子どもと親の記憶と語りから.....	89
1. 「移動が常態である」という視点.....	90
2. 「複数言語環境の子ども」をめぐる研究のレビューと課題.....	91
3. 調査の概要と研究方法.....	92
4. 事例(1) Eさんと息子のSさん、Kさん.....	93
5. 事例(2) Aさんと息子のBさん.....	102
6. 「移動する子ども」をめぐる研究主題とは何か.....	111
第6章 「ことばの力」と「ことばの教育」 ——子どもの日本語教育のあり方を問う.....	115
1. ある小学校のクラスから.....	116
2. 国語教育と日本語教育の統合と連携の発想.....	117
3. 複言語能力とは.....	119
4. メトロリンガリズム、トランスランゲージング.....	120
5. 「DLA」では子どもの「ことばの力」は把握できない.....	123
6. 子どもの「ことばの力」とは何かという議論が進まない理由.....	125

7. 「ことばの力」から「ことばの教育」実践へ	127
第7章 「移動とことば」を昇華する——温又柔を読む	129
1. はじめに	130
2. 温又柔の自己エスノグラフィー ——『台湾生まれ 日本語育ち』	132
3. 温又柔の小説世界——『来福の家』	144
4. 「移動する子ども」という記憶	149
5. 「移動する子ども」学の射程	151
第8章 モバイル・ライブズを生きる——岩城けいの物語世界を読む	153
1. はじめに	154
2. 「移動させられた子」の世界	155
3. 「成長と自立」の物語か	156
4. 多様な「移動する人々」	158
5. モバイル・ライブズを生きる「移動する人々」	161
6. 『ジャパン・トリップ』	163
7. 移動する子どもたち	164
8. 移動とことば	167
9. 「移動とことば」は続く	168
10. 『Matt』	169
11. 「移動する人々」の心情	172
12. 「移動する家族」	174
13. 「移動する子ども」というフィールド	176
第9章 海に浮かんでいる感じ ——モバイル・ライブズに生きる若者の語り	179
1. はじめに	180
2. 調査	183
3. 事例研究——シュミット誠さんのケース	184

4. 考察—「移動する子ども」から考える	199
5. モバイル・ライブズと「移動する子ども」.....	202
第10章 記憶と対話する	
—ある女性の半生の「移動する子ども」という記憶.....	205
1. はじめに.....	206
2. 調査.....	208
3. 事例研究—マユミさんのケース.....	208
4. 考察—「移動する子ども」から考える	224
5. 記憶と対話する	227
第11章 人生とことばの風景	
—映画監督崔洋一のことばをめぐる語り	231
1. 崔洋一監督との出会い.....	232
2. 崔洋一監督のライフストーリー	233
3. 人生とことばの風景—崔洋一の場合	260
第12章 展望—実践の学としての「移動する子ども」学.....	
1. 「移動する子ども」学の展望.....	266
2. 成果と課題.....	267
3. 実践の学としての「移動する子ども」学.....	270
あとがき	273
参考文献.....	277
索引.....	283

序

なぜ「移動する子ども」学なのか

1. はじめに

本書は新しい学問領域として「移動する子ども」学を提案する。

子どもに関するテーマは多様にある。たとえば、子どもの誕生から心身の発達、言語習得、学力と心の成長、社会性の育成、社会参加など多様な課題があり、それらを探究する学問領域として保育学、児童心理学、学校教育学、教育社会学、心理言語学、教育人類学などがすでにある。

しかし、本書の「移動する子ども」学は、これらの既存の学問領域と重なりつつ、微妙にズレている。一般に、自然科学は自然を対象にする学問群であり、人文社会科学は人間を対象にする学問群と呼ばれる。「移動する子ども」学も、人間理解を目指す学問領域であるという意味で、当然、後者に含まれる。

では、「移動する子ども」学とは、何を研究対象に、どのような方法で探究する学問領域と考えられるのか、またそれはなぜ今、必要なのか、具体的に考えてみよう。

2. 「移動する子ども」という現象

最近、国際色豊かな若いアスリートがたくさん活躍している。たとえば、ダルビッシュ^{ゆう}有さん（野球選手）、ケンブリッジ飛鳥さん、サニブラウン・アブデル・ハキームさん（ともに陸上競技選手）、八村塁^{ほちむらい}さん（バスケット

このような「移動」と「ことば」というバイフォーカルな視点に立つ「移動する子ども」学は、必然的に、既存の学問領域の視点と研究方法と微妙にズレた視点を取ることになり、結果として、既存の学問領域を超えた学問領域を創出することになる。それは、新たな子ども理解や、認識枠組み、成長と記憶、人の主観的な意味世界を探究することになり、21世紀に生きる人々の移動性、複文化性、複言語性のリアリティを明らかにすることになる。

7. 本書の構成

本書は12章から構成されている。以下に、それぞれのどのような問題意識から書かれたものかを述べることによって、「移動する子ども」学の研究領域の輪郭を示したいと思う。

第1章と第2章は、「移動する子ども」学の理論編になる。

第1章は、「移動」が100年以上前から社会における重要なテーマとなっていたことを確認する。その後、「異郷人」「異人」「マージナル・マン」「ストレンジャー」などとして研究されてきた研究史を振り返り、「移動する子ども」学の本質的課題が何かを検討し、かつ、このテーマが21世紀の現代にも繋がる重要なテーマであることを論じる。

第2章は、近年の人口移動とグローバル化の進む中で、人類学、歴史学、社会学、経済学、国際関係論などで、「移動」が大きな研究テーマになっており、人文科学あるいは社会科学において外せない重要な主題であることを論じ、その中に「移動する子ども」学が位置づけられること、また研究方法として地動説的アプローチから、当事者の主観的な意味世界を探究することが、この学の中心的テーマであることを確認する。

第3章から第6章までは「複数言語環境で成長する子ども」を具体的な事例をもとに検討しつつ、研究をするうえでの課題を検討する。

第3章では、これまでの子どもに関する国内外の研究をレビューし、それらの課題を検証しつつ、「移動する子ども」学がそれらの先行研究とどのように違うかを、^{ひととたえ}一青妙さんの自己エスノグラフィーを例に検討する。

第4章は、「複数言語環境で成長する子ども」に関する方法論に関連して、

研究対象のくくり方の問題点を、ベトナム難民として来日した親を持つ子どもを事例に検討する。そのうえで、「移動する子ども」をめぐる「名付け」と「名乗り」の弁証法的関係について論じる。

第5章は、「移動する子ども」に関する研究で、何が主題となるかについて、タイに暮らしながら複数言語環境で子育てをした母と子の具体的な語りにそくして議論を展開する。

第6章は、複数言語環境で成長する子どもの「ことばの力」をどのように捉えるか、そしてそれを踏まえて、どのような「ことばの教育」が必要かについて、日本の現状と課題も分析しながら、論じる。

第7章と第8章は、文学作家の作品を取り上げる。第7章は、台湾に生まれ幼少期に来日した作家、^{おんゆうじゅう}温又柔さんのエッセイと小説を検討する。さらに第8章は、オーストラリアに在住する作家、^{いわき}岩城けいさんの小説を検討する。どちらもエッセイや小説であるが、描かれている世界は、まさに「移動する子ども」学の主題に通じる。換言すれば、「移動する子ども」学と文学研究の協働的研究の可能性を示唆する。

第9章から第11章までは、国際結婚した親のもと、「複数言語環境で成長した子ども」が大人になった事例研究である。第9章は、ドイツ生まれの20歳代の男性の語りを検討する。また第10章は、ドイツ生まれの40歳代の女性の語りを検討する。「移動する子ども」の経験と記憶を持つ女性が親になった事例である。第11章は、日本生まれの高齢者の男性の語りである。「移動する子ども」の経験と記憶を持つ人が高齢期になると自身のアイデンティティとことばをどう考えるかについて、当事者の語りをもとに考える。

最後の第12章では、「移動する子ども」学の展望を述べる。ご覧の通り、「移動する子ども」学の取り扱う課題やテーマは、子どもに限らない。幼少期、成長期、青年期、壮年期から高齢期まで関わる。また日本国内だけではなく、世界各地に居住する人も含む。さらに、当然ながら、空間の移動、言語間の移動、言語教育カテゴリー間の移動、さらに、日常的な移動の軸と、過去と未来の時間を移動する軸とも繋がる人間の生に関するテーマを探究する。

これらのテーマは、既存の学問領域だけでは収まらないものである。それゆえに、本書は「移動する子ども」学を提起する最初の書となるだろう。